第 143 回 火山噴火予知連絡会資料

(その2)

口永良部島、諏訪之瀬島、阿蘇山

平成 31 年 2 月 27 日

火山噴火予知連絡会資料(その2)

目次

口永良部島······3 気象庁(気象研含む) 3-23 京大桜島 24-30 防災科研 31-38 産総研 39-45 地理院 46-53 海保 54-59 気象庁 60-64 京大桜島 65-66 地理院 67-69 気象庁(地磁気含む) 70-83 京大阿蘇 84-86 防災科研 87-92 地理院 93-97

口永良部島では、新岳火口付近の火山性地震の回数が増減を繰り返し、火山ガス(二酸化硫黄) の放出量がやや多い状態で経過している中で、2018 年8月に入り、火山性地震の回数及び火山ガ ス(二酸化硫黄)の放出量が増加し、8月15日には、新たなマグマの貫入の可能性を示唆する新 岳西側山麓深部を震源とする火山性地震が発生するなど、火山活動の活発化が認められている状況 で、10月21日に新岳火口でごく小規模な噴火が発生した。同程度の火山灰の噴出は、断続的に12 月13日まで続いた。

小休止を経て、12月18日に火砕流及び大きな噴石を伴う噴火が発生し、その後も火砕流や大きな噴石を伴う噴火が時々発生した。2019年1月17日に発生した噴火は、2018年10月以降の噴火活動で最も規模の大きなものとなった。

口永良部島では、やや規模の大きな噴火を繰り返しており、今後も1月17日のような火砕流を 伴い新岳火口から概ね2kmに影響を及ぼす噴火の可能性がある。

新岳火口から概ね2km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に 警戒が必要である。また、向江浜地区から新岳の南西にかけての火口から海岸までの範囲では、火 砕流に警戒が必要である。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意が 必要である。

気象庁

項 目	現象	14.08	14.09	14.10	14.11	14.12	15.01	15.02	15.03	15.04	15.05	15.06
		18.03	18.04	18.05	18.06	18.07	18.08	18.09	18.10	18.11	18.12	19.01
表面現象	噴煙 の状 況	2014年8月の噴火以降、噴煙量やや増加(平均噴煙高は数十m程度から数百m 利									5/29 爆発(火 砕流)	6/18 爆発
									10/21~12 断続的灰噴	?/13 火	12/18他 爆発 (火砕流)	1/17他 爆発 (火砕流)
	火映							3/24~本村カメラ 新岳西側割れ目付近の火央を観測				
									11/7~17z 新岳火口内	▶村カメラ の火映		
	熱異			南西斜面で	新たな噴気&	熱異常域		2015年2月	頃より新岳西	の熱異常域の温度上昇		
	常域	2017年頃から新岳西側割れ目付近の温度低下傾向										
火山	SO2 量の 増加			10月からS0 ~11月500	10月からSO2増加 10 12月からSD2が更に増 ~11月500~700 ^ト > 年1月3100 ^ト >、2月27			卯 最大値は2014年12月1900└ӽ 2015 0└ӽ 3月3700└ӽ、4月2600└ӽ			下旬300~700 [⊦] ∞ 減	
ガ ス							2018年8月 数百 [▶] _{>} ~最	以降SO2増加 大1700 ^ト ୬		100~1000~2001~20101~2010~2010~2010~2010		 減大きく不安定
震動	火口 直下 地震 増加								3月よりBL	型がやや増加	2	
		2017年10月頃より高周波のA・BH型が増加 2018年に入り周期の長いB・BL型も時々発生 増加(35回					・時的にB型 その後減少	りにB型 10/21~12/13 噴火前にBH型増加する D後減少 噴火に伴う地震・微動 発生		する傾向		
	新岳西側						1/24 D=5km M2.2				5/23,D=0km,M 2.3	
	山鹿 地震						8/15 D=5km M1.9					
地殻変動	傾斜 変化										噴火に伴う傾斜 噴火に伴う傾斜	
	GNS S					12月~2月 基線でわず	にかけて新岳 かな伸びの傾	火口を挟む 句				
						【SVO】新 【JMA】島	「岳を挟む短い 内の長い基線	基線で伸び(8 :7月縮み停滞	3/15前後) き 10月緩やか)伸び 11 <mark>月</mark> 鈩	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
	水準 測量	2014年08月~2015年03月で2.5mmの隆起(茂木:D=7.5km,dV=3.7*10 ^e m)										
		2017年09月~2018年08月で2.4mmの隆起(2015年と同等)									* ·	

2019年1月まで

 \frown

2015年6月噴火まで

表1 火山活動経過の比較(

4



図1 口永良部島 短期の火山活動経過図(2018年7月~2019年2月18日)

<2018年10月から2019年2月18までの火山活動の状況>

- ・2018 年 10 月 21 日から 12 月 13 日にかけて、新岳火口で断続的に火山灰を噴出する活動が継続。
- ・2018年12月中旬以降は、火砕流や大きな噴石を伴う噴火が時々発生。
- ・2018年10月から11月の夜間に時々観測された火映は、12月以降はみられない
- ・火山ガス(二酸化硫黄)の放出量は、1日あたり100~2,200トンと増減が大きく不安定な状態で経過。
- ・2018 年 10 月から 12 月にかけての噴火時、火山性地震及び微動は主に噴火に伴って発生、12 月中旬以降 は噴火前後に地震回数が増加。
- ・新岳の西側山麓のやや深い場所を震源とする火山性地震は、2018年8月15日に発生して以降観測されて いない。
- ・GNSS 連続観測では、島内の長い基線において、2016年1月頃から緩やかな縮みの傾向が続いていたが、2018年7月頃から停滞しているとみられる。



		表面	面現象	震動	地殻変動		
噴火発現時刻 (年月日時分)	噴煙高 (火口縁上最高) [m]	火砕流 (最長距離) [m]	大きな噴石 (最長距離) [m]	噴火継続時間 (噴煙量 2 以上) [時間分]	地震振幅 (古岳南山麓UD) [μm/s]	空振振幅 (本村東) [Pa]	山下りの傾斜変化 (新岳北東山麓) [µrad]
2018/12/18 16:37	4,500	1,000	700	2時間02分	183	29	0.028
2018/12/28 22:09	1,000	-	500	0時間30分	57	16	0.025
2019/01/02 01:53	200	-	200	-	8	-	-
2019/01/17 09:19	6,000	1,900	1,800	1時間41分	553	201	0.069
2019/01/20 20:51	200	-	-	-	128	-	0.011
2019/01/29 17:13	4,000	600	-	2時間02分	208	4	0.028
2019/02/02 11:41	400	-	-	1時間19分	3	-	-

噴火発現時から噴煙量2以上(新岳火口縁上噴煙高概ね400m程度以上)が継続する時間を噴火継続時間とした。



図2 口永良部島 ごく短期の火山活動経過図(2018年12月14日~2019年2月18日)

<2018年12月14日から2019年2月18日までの火山活動の状況>

- ・2018年12月中旬以降、火砕流や大きな噴石を伴う噴火が時々発生。
- ・火山ガス(二酸化硫黄)の放出量は、噴火前には100~500トン程度で推移し、噴火後に増加。
- ・噴火前に火山性地震(H型地震)の回数が増加する傾向。



7



8



図 3-3 口永良部島 噴火発生時の状況 (2019 年 1 月 29 日 17 時 13 分)

<2018年12月以降の火砕流を伴う噴火の発生時の状況>

- ・いずれの噴火も、はじめに数 Hz 程度の低周波成分を含む火山性地震が発生し、続いて噴煙放出に伴うと 思われる 10Hz 程度の高周波成分が卓越する震動が数分間継続。また、噴火時に発生した火山性地震によ る長周期の変位と、噴火に伴う山下がりの傾斜変化を観測。
- ・12 月 18 日及び 1 月 17 日の噴火は地震発生後まもなく噴煙が見え始めるが、1月 29 日の噴火は最初の 地震波形到達から噴煙が見え始めるまで 90 秒程度かかっている。また空振についても、前者の噴火では 立ち上がりが明瞭な空振を伴うのに対し、後者の噴火では立ち上がりが不明瞭な噴煙放出に伴うと思わ れる空振しかみられない。この違いは前者の噴火が後者に比べてより爆発的であることを示唆している。



- 図4 口永良部島 2019年1月17日09時19分に発生した噴火で観測された震動波形のペーストアップ
 (縦軸:新岳火口からの距離 横軸:1月17日09時15分00秒からの経過時間 波形1段目:島内短周期地震計上下動 波形2段目以降:島外広帯域地震計上下動の BPF 0.01-0.1Hz)
 - ・2019 年 1 月 17 日 09 時 19 分に発生した噴火に伴い、口永良部島の周辺 300km 程度に設置している広帯域 地震計で、周期約 10 秒の震動を観測した。
 - ・他に比べて何倍も震動の大きな噴火であったことから、九州全域で観測されるような長周期地震動を励起したと推定される。



図5 口永良部島 噴火発生時の空振振幅の状況(2014年~2019年1月)

(上図:新岳北東山麓と本村東の空振振幅比、下図:本村東で観測された空振振幅の推移)

- ・島内2箇所で観測された空振振幅比が概ね一定であることから、2014年~2019年までの一連の噴火 活動における空振の発生場所は変化していないと考えられる。
- ・本村東観測点で 10Pa を超えると、火砕流や大きな噴石を伴う噴火(爆発)が発生する傾向がみられる。また、2018 年の灰噴火時における空振振幅は概ね 1 Pa 以下である。
- ・2019/1/29の噴火は爆発的ではないが噴煙が火口縁から溢れることで火砕流が発生。



噴火までの火山性地震(BH型地震)の回数積算(2018年12月14日~2019年2月18日) 2018年12月中旬以降、噴火前に火山性地震(BH型地震)の回数が増加する傾向がみられる。



噴火に伴う新岳北東山麓観測点の傾斜変化例(分値) (左:2018年12月18日16時、右:2019年1月17日09時) 一部の噴火では、噴火に伴い新岳方向がわずかに沈降する傾斜変化が観測された。



図6 口永良部島 噴火に伴う傾斜変化と BH 型地震回数の関係(2018年12月~2019年1月) ・口永良部島の2018年12月から発生する噴火について、噴火が停止してから次の噴火までに発生 する BH 型地震の回数と、噴火に伴う傾斜変化量(新岳北東観測点)には正相関がみられる。



<2018年10月~2019年2月18日の状況>

・震源が求まった火山性地震は31回で新岳火口付近の深さ0~1km付近に分布した。

・新岳の西側山麓のやや深い場所を震源とする火山性地震は観測されていない。

この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図 50mメッシュ (標高)』を使用した。



これらの基線は図9の ~ に対応している。基線の空日部分は欠測を示している 2016年1月以降のデータについては、解析方法を変更している。 (国):国土地理院

14



図 9 口永良部島 GNSS 連続観測基線図 小さな白丸()は気象庁、小さな黒丸()は気象庁以外の機関の観測点位置を示す。 (国):国土地理院 この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図 50mメッシュ(標高)』を使用した。



図 10 口永良部島 観測点配置図

小さな白丸()は気象庁、小さな黒丸()は気象庁以外の機関の観測点位置を示す。 (国):国土地理院、(京):京都大学、(防):防災科学技術研究所 この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ(標高)』を使用した。 図中の灰色の観測点名は、噴火や停電等により障害となった観測点を示す。

ALOS-2/PALSAR-2 データを用いた ロ永良部島における SAR 干渉解析結果

山頂付近で噴火に伴う非干渉領域が認められる。

1. はじめに

ALOS-2/PALSAR-2 で撮像された口永良部島周辺のデータについて干渉処理を行ったので 報告する。

2. 解析データ

解析に使用したデータを第1表に示す。

第1表 干渉解析に使用した・	データ	ק
----------------	-----	---

Path-Frame	Orbit	Looking	Inc. angle	Earliest Scene	Latest Scene	Figure No.
22 2000/SM1 U2 7)		右	26.1°	2018.01.22	2019.01.21	第1図-A
23-3000(31/11_02-7)	南行		50.1	2018.12.24	2019.01.21	第2図-A
28-2970(SM1_U2_7)		左	34.1°	2018.10.26	2019.01.18	第2図-B
126-630(SM1_U2_7)		左	34.5°	2019.01.18	2019.02.01	第2図-C
122 500/SM1 U2 11)	北行	右	10.2°	2018.05.27	2019.02.03	第1図-B
152-390(SMI1_03-11)			40.3	2019.01.20	2019.02.03	第2図-D

3. 解析結果

北行軌道及び南行軌道の長期・短期ペアについて解析を行った。長期ペア(第1図)で は、山頂付近で噴火に伴う地表面の状態変化による非干渉領域が認められる。

短期ペア(第2図)では、第2図-A及びBにおいて、山頂付近で噴火に伴う地表面の状態変化による非干渉及び低相関が認められる。第2図-Cではノイズレベルを超えるような位相変化は認められず、全島的に高相関である。第2図-Dでは山頂付近では衛星視線方向短縮の位相変化及び低相関、島の東部及び南端では伸長の位相変化が認められる。

なお、第1図に示した各干渉解析結果について、対流圏遅延補正などは行っていないため、ノイズが重畳している可能性がある。

謝辞

本解析で用いた PALSAR-2 データは、火山噴火予知連絡会が中心となって進めている防災 利用実証実験(衛星解析グループ)に基づいて、宇宙航空研究開発機構(JAXA)にて観測・ 提供されたものである。また、一部のデータは緊急観測されたものである。PALSAR-2 に関 する原初データの所有権は JAXA にある。PALSAR-2 の解析ソフトウェアは、防災科学技術 研究所の小澤拓氏により開発された *RINC*を使用した。また、処理の過程や結果の描画にお いては、国土地理院の数値地図 10m メッシュ(標高)を元にした DEHM を、地形の描画には 数値地図 25000(行政界・海岸線)のデータを使用した。ここに記して御礼申し上げます。



第1図 口永良部島周辺の長期ペアによる干渉解析結果

図中の白三角印は山頂位置を示す。丸印は GNSS 観測点、四角印は傾斜観測点を示す。山頂付近で、 噴火に伴う地表面の状態変化による非干渉領域が認められる。



第2図 口永良部島周辺の短期ペアによる干渉解析結果(干渉画像:左、相関画像:右)

A及びBでは山頂付近で非干渉及び低相関が認められる。Cではノイズレベルを超えるような位相 変化は認められず、全島的に高相関である。Dでは山頂付近では衛星視線方向短縮の位相変化及び 低相関、島の東部及び南端では伸長の位相変化が認められる。

気象レーダーで観測した 2019 年1月17日口永良部島噴火

に伴う噴煙・火山灰雲エコーについて

- ・気象庁一般気象レーダー(種子島・名瀬)によって、2018年10月~2019年1月の 口永良部島の噴火に伴う噴煙・火山灰雲エコーの一部が捉えられた。
- ・一連の噴火活動において最大規模であった 2019 年1月17日9時19分の爆発的噴火事例では、種子島レーダー(口永良部島のN73°E、76km)では最高で仰角4.5°(ビーム中心・海抜約6.7kmに相当)、名瀬レーダー(S16°W、236km)では最高で仰角0.7°(海抜約6.5kmに相当)でエコーを捉えた。
- ・エコーは、対流圏下層(概ね海抜2km以下)では南東及び東に流れ、対流圏中層 (概ね海抜3~6km)まで上がったエコーは、落下しながら屋久島を超えて東に流れ た。この結果は、他の観測データ(ひまわり8号や京都大学防災研究所小型XMPレ ーダー)とも整合的である。このような高度による流向の違いは、風の鉛直シア (鉛直方向の変化)が原因と考えられる。
- その他の噴火事例では、気象庁一般気象レーダーのスキャンシーケンスや感度の問題で、噴煙高度を精度良く推定するための十分なデータが得られなかった。





図 2:2019 年 1 月 17 日 9 時 20 分~40 分(JST)の名瀬レーダーによる反射強度。 同心円は火口から約 5km、10km、15km を示す。



図3:2019年1月17日9時20分~40分(JST)の種子島レーダーによる反射強度

海抜 1.5km 高度平面図(1段目)、4.5km 平面図(2段目)、火口から方位 90°方向鉛直断面図(3段目)。方位 135°断面図(4段目) 平面図の同心円は、火口(▲)から 10km、20km、30km、40km を示す。表示している時刻から約3分間のデータが合成に用いられている。断面図に おけるエコー高度は未補正のため過大である可能性があることに注意。



図4 2019年1月17日6~12時(JST)における気象庁ウインドプロファイラ(屋久島)による水平風の観測(時間-鉛直断面) 矢羽は水平方向の風速と風向を、丸印(内のカラー)は風の鉛直シアを表す。茶色の破線は鉛直シアの強い境界を示している。時刻(JST)は右か ら左に進むように描画していることに注意。

気象研究所

注意事項:

エコー高度の精査や気象(降水)エコーとの区別など、更なる解析が必要。ビーム高度は、等価地 球半径を地球半径の 4/3 倍と近似して計算した。大気の屈折率とビーム幅による誤差、低仰角では観測 値が地形除去処理の影響を受けることに注意。現状では、噴煙エコーと局所的な気象(降水)エコー との明瞭な区別は出来ない。

参考文献

福岡管区気象台地域火山監視・警報センター・鹿児島地方気象台(2019): 口永良部島の火山活動解説 資料(平成31年1月), <<u>https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/monthly v-</u> <u>act_doc/fukuoka/19m01/509_19m01.pdf></u>.(2019年2月18日アクセス) 京都大学防災研究所(2019): 口永良部島 2019年1月17日噴火のレーダー観測, <<u>http://www.svo.dpri.kyoto-u.ac.jp/new/wp-</u> content/uploads/2019/01/RadarKuchinoerabu20190117.pdf>.(2019年2月18日アクセス) ロ永良部島噴火の噴煙のレーダー観測



図 口永良部島の地形図。レーダー(▽)は番屋ヶ峰避難所の屋上に設置されている。今回の噴火 が発生した新岳火口はレーダーからみると N125°E の方向に位置しており、水平距離 4.7 km であ る。



図 2018/12/18 16:39:13(噴火開始1分後)のレーダー反射強度断面図。水平距離0に レーダーがあり、水平距離 4.7km が火口。



図 2018/12/18 16:41:35(噴火開始3分後)のレーダー反射強度断面図。水平距離0にレーダ ーがあり、水平距離4.7kmが火口。



図 2019/1/17 9:21:04(噴火開始1分後)のレーダー反射強度断面図。水平距離0にレーダー があり、水平距離4.7kmが火口。



図 2019/1/17 9:21:14(噴火開始2分後)のレーダー反射強度断面図。水平距離0にレーダー があり、水平距離4.7kmが火口。



図 2019/1/29 17:15:38(噴火開始 2 分後)のレーダー反射強度断面図。水平距離 0 にレーダ ーがあり、水平距離 4.7km が火口。



図 2019/1/29 17:18:00(噴火開始 5 分後)のレーダー反射強度断面図。水平距離 0 にレーダ ーがあり、水平距離 4.7km が火口。



図.2014年8月3日、2015年5月29日、2015年6月18日、2018年12月18日、2019年1月17日、 2019年1月29日噴火の空振記録。

KUC7-KUC9 水平距離変位および地震回数との相関



(2018年7月1日~2019年2月9日まで)

口永良部島における水平変位



GPS 連続観測(2019年2月6日まで)

第143回火山噴火予知連絡会

京大防災研究所 東大地震研究所

口永良部島における地震活動の推移





ロ永良部島における火山性地震の発生回数 (2019年1月31日まで)

口永良部島に関する PALSAR-2/InSAR 解析結果

2018 年 12 月 18 日、2019 年 1 月 17 日、2019 年 1 月 29 日に口永良部島で噴火が発生した。この噴火に 関する調査のため、だいち 2 号の PALSAR-2 による緊急観測が実施された。本報告においては、それらのデ ータに SAR 干渉法を適用した結果を述べる。

2018年12月18日の噴火発生時を挟む干渉ペアを解析した結果を第1図、2019年1月17日の噴火発 生時を挟む干渉ペアを解析した結果を第2図、2019年1月29の噴火発生時を挟む干渉ペアを解析した結 果を第3図に示す。これらの解析結果において、地殻変動を示す顕著な位相変化は見られない。

コヒーレンス画像においては、新岳火口周辺に、降灰に起因すると考えられる明らかな干渉性劣化が見られた。第4回に干渉性劣化域の比較を示す。2018年12月18日においては、新岳火口付近の半径500m程度の範囲で、降灰に起因すると考えられる干渉性劣化が見られた。2019年1月17日においては、新岳火口から西側の約1kmの範囲で、降灰に起因すると考えられる干渉性劣化が見られた。さらに、南西と北西の谷に沿っては、干渉性劣化域が約1.5kmの範囲まで延びている。2019年1月29日の噴火に関しては、新岳火口周辺のごく狭い範囲において、降灰に起因すると考えられる明らかな干渉性劣化が見られた。これらを比較すると、干渉性劣化域の範囲は2019年1月17日がもっとも大きい。ただし、この範囲は、2015年5月29日の噴火における干渉性劣化域よりも小さい。2019年1月29日の噴火における干渉性劣化域は、2018年12月18日の噴火における干渉性劣化域よりも小さく、火口のごく近傍に限られている。

謝辞.本解析で使用した PALSAR-2 データの一部は、東京大学地震研究所と宇宙航空研究開発機構との共同 研究に基づいて提供され、PIXEL で共有しているものである。また、一部は、防災利用実証実験火山 WG を通じ て提供されたものである。PALSAR-2 データの所有権は JAXA が有する。解析および図の作成においては、国土 地理院の地理院地図および基盤地図情報 10m メッシュ DEM を使用した。



第1図. 2018/12/18 の噴火を挟む PALSAR-2 データの SAR 干渉解析結果。上段は干渉画像、下段はコヒーレンスを示す。赤三角印は新岳火口を示す。(a)パス23(南行、右)の2018/8/20と2018/12/24の干渉ペア解析結果。(b)パス126(北行、左)の2018/10/26と2018/12/21の干渉ペア解析結果。



第2図. 2019/1/17の噴火を挟む PALSAR-2 データ(西方向視)の SAR 干渉解析結果。上段は干渉画像、下段 はコヒーレンスを示す。赤三角印は新岳火口を示す。(a)パス 23(南行、右)の 2018/12/24 と 2019/1/21 の干渉ペア解析結果。(b)パス 126(北行、左)の 2018/10/21 と 2019/1/18 の干渉ペア解析結果。



第3図. 2019/1/29 の噴火を挟む PALSAR-2 データの SAR 干渉解析結果。上段は干渉画像、下段はコヒーレンスを示す。赤三角印は新岳火口を示す。(a)パス 126(北行、左)の 2019/1/18 と 2019/2/1 の干渉ペア 解析結果。(b)パス 132(北行、右)の 2019/1/20 と 2019/2/3 の干渉ペア解析結果。



第4図. 2018/12/18、2019/1/17、2019/1/29 および 2015/3/29 の噴火発生時を挟む干渉ペアを解析して得られた コヒーレンス画像において見られた、降灰によると推測される干渉性劣化域。

口永良部島火山 2018 年 12 月 18 日・2019 年 1 月 17 日・29 日噴火の

降下火砕堆積物の分布

口永良部島噴火の降下火砕物について分布調査を行い噴出量の推定を試みた。屋久島等の遠方地域の堆 積量分布から求められた噴出量は、2018年12月18日噴火では約2.9万t、2019年1月17日噴火では約 6.2万t、1月29日噴火では約1.4万t程度であった。

○はじめに

ロ永良部島火山の2018年10月以降の活動において東側に隣接する屋久島や種子島で降灰が認められる ような比較的大きな噴火は2018年12月18日、12月28日、2019年1月17日、1月29日に発生した。こ のうち降灰軸が南東方向にあり陸上に降灰が少なかった12月28日噴火を除く3つの噴火について、噴火 直後に降灰に関する資試料を収集し、試料の観察・分析を行った。さらに口永良部島島内で2月上旬に調 査を行い山体近傍での堆積状況を観察した。

○堆積物の特徴

堆積物は肉眼的には明灰色ないし淡く赤みを帯びた明灰色の砂質〜シルト質火山灰層で、1月29日噴火 の試料についてはやや赤みが強い傾向がある。鏡下観察ではいずれも石質岩片や熱水変質岩片、結晶片(斜 長石、単斜輝石、斜方輝石、鉄チタン酸化物等)を主体としており新鮮なガラス質岩片は少ない。X線回 折実験では変質鉱物として黄鉄鉱・ミョウバン石・石膏・硬石膏・クリストバライト、トリディマイト、 少量の7Åの底面間隔をもつ粘土鉱物(おそらくカオリン鉱物)が検出されている。今回扱った試料にお いては噴火イベントごとによる構成物の違いはほとんど確認できなかった。

○12月18日噴火の堆積物の分布

屋久島地学同好会中川正二郎氏から12月19日午後の屋久島北西部での調査結果の提供を受けた。その 結果によると、降灰軸は永田岬から安房にかけて屋久島の中央部を横切っており、永田岬(火口から約 17km)付近では300g/m²以上(図1a)、永田〜川原付近で100g/m²程度で堆積したと推定される(図2a)。 粗粒砂サイズの粒子も多く含んでおり、永田岬の試料では最大長径3mmの粒子が確認された。 〇1月17日噴火の堆積物の分布

調査は屋久島において1月18日~19日、種子島において19日~20日にかけて行った。なお、17日噴 火直後の宮之浦市街地での堆積量データについては中川正二郎氏から提供を受けた。屋久島では粗粒砂粒 子を多く含む堆積物(図1b~図1d)で、しばしば凝集粒子や泥雨として降下したことを示す直径数~5mm 程度の斑点状の火山灰塊が含まれていた。種子島の分布域では砂粒子を少量含む細粒火山灰が直径ないし 幅が数 mm 程度の斑点状ないし筋状に付着していることから(図1e)、全域で泥雨となって降下したとみら れる。降灰軸はやや蛇行しながら屋久島の北部を横切り種子島南端付近を通過している(図2b)。永田いな か浜(火口から約22km)付近では420g/m²以上、宮之浦川中流付近で200g/m²程度、小瀬田(火口から約40km) で100g/m²程度、種子島門倉岬付近(火口から約65km)で20g/m²程度堆積した。降灰北限は屋久島一湊付 近から種子島野間の南方付近と推定される。屋久島南西部栗生付近では数g/m²程度の堆積物が存在してお り、降灰南限は屋久島南東部の尾之間と安房を結ぶような位置と推定されるが明確ではない。堆積物に含 まれる岩片粒子の最大粒径の分布は降灰軸よりもやや北にずれており(図2c)、吉田北方の展望台(火口か ら約24km)で長径4mm(図1c)、宮之浦(火口から約34km)で1mmの粒子が確認された。降灰軸と粒径分布の 軸のずれは高度によって風向や風速が異なることで説明されうる。

○1月29日噴火の堆積物の分布

気象庁ロ永良部島火山防災連絡事務所と中川正二郎氏に1月29日夜~30日の調査結果や聞き取り情報の提供を受け、それらをもとに屋久島における堆積量分布図を作成した(図2d)。降灰軸は永田付近から楠川付近にかけて屋久島の北部をやや湾曲しつつ東西に横切っており、永田付近(火口から約21km)では70g/m²以上(図1f)、楠川付近(火口から約37km)では5~10g/m²程度の火山灰が堆積したと推定される。粒

第143回火山噴火予知連絡会

2019年2月6日~7日に口永良部島南東部で調査を行った。遠望観察によると古岳上部(新岳火口南東約500m)には厚い噴出物(厚さ10 cm以上?)が残存していた。山麓の七釜火山観測施設では420g/m²程度、火口南東側の林道では最大11.8 kg/m²程度の堆積物が残存しており(図3a、図4)、長径4~5cm程度の火山礫も含まれていることが確認できた(図3b、図4)。堆積量が多いところでは堆積物下部は細粒火山灰層(図3c)、上部は火山砂礫層となっており、下部は2018年12月18日及び12月28日噴火に、上部は大部分が2019年1月17日噴火の堆積物に対応する可能性が高い。 〇噴出量の算出

降下火砕物の噴出量は堆積密度を 1000 kg/m³として Fierstein and Nathenson (1992)の方法により求 めた。屋久島などの遠方の堆積量分布データ(図2)からは 2018 年 12 月 18 日噴火では約 2.9 万 t、2019 年 1 月 17 日噴火では 6.2 万 t、1 月 29 日噴火では 1.4 万 t、合計で 10.5 万 t 程度と見積もられる。いず れも同様な方法で見積もった 2015 年 5 月 29 日噴火の降下火砕物の噴出量(約 12 万 t)より小さい。なお、 これらの遠方データに、12 月 28 日噴火等の量的寄与は小さいとみなして口永良部島内の堆積量(図4) を加えて 2018 年 12 月~2019 年 1 月の降下火砕物量全体に相当する噴出量を計算した場合、約 13 万 t と なる。

謝 辞

気象庁ロ永良部島火山防災連絡事務所と屋久島地学同好会の中川正二郎氏には調査資料を提供して頂いた。 ロ永良部島、屋久島、種子島の在島の方々には各地の降灰状況について情報を頂いた。記して御礼申し上げる。







(b) 永田いなか浜展望所(1月17日噴火)



(c)吉田北方の東シナ海展望所(1月17日噴火)
 (d)屋久島空港東(1月17日噴火)
 図1 屋久島・種子島における火山灰堆積状況

防災科学技術研究所



(e) 種子島・門倉岬北西の前之原(1月17日噴火) (f) 永田・叶地区のベンチ(1月29日噴火)

図1 屋久島・種子島における火山灰堆積状況(続き)

(a) 2018年12月18日噴火で屋久島・永田岬灯台(火口東南東約17km)近くのクワズイモの葉の上に堆 積した火山灰(12月19日中川正二郎氏撮影)。降灰量362g/m²。(b) 2019年1月17日噴火で屋久島・ 永田いなか浜展望所(火口東南東約22km)のテーブル上に堆積した火山灰(1月18日撮影)。堆積物の 隙間(白く見える)は17日夜間の降雨による雨滴痕と思われる。降灰量428g/m²。(c) 2019年1月17 日噴火で屋久島・吉田北方の東シナ海展望所(火口東約24km)のベンチ上に堆積した火山灰(1月18 日撮影)。長径4mm~1mmの岩片粒子と泥雨(凝集)火山灰粒子がまばらに堆積している。降灰量3.6 g/m²。 (d) 2019年1月17日噴火で屋久島・屋久島空港南東の駐車場(火口東約44km)の車両上に堆積した火 山灰(1月18日撮影)。隙間は17日夜間の降雨による雨滴痕と思われる。降灰量87 g/m²。(e) 2019年 1月17日噴火で種子島・前之原(火口東約64km)の電柱のステーワイヤーカバーに付着した泥雨火山灰(1 月19日撮影)。写真の右手前側(北西~北側)から吹き付けたようにみえる。(f) 2019年1月29日噴火で 屋久島・永田叶地区(火口東南東約21km)のベンチに堆積した火山灰(1月30日中川正二郎氏撮影)。降 灰量72g/m²。



図2 2018年12月18日・2019年1月17日・1月29日噴火の堆積量と最大粒径値の分布




図2 2018年12月18日・2019年1月17日・1月29日噴火の堆積量と最大粒径値の分布(続き)

防災科学技術研究所



(a) 火口南南東側の林道上の堆積物



(c) 林道上の堆積物下部の火山灰層



(b) 写真(b)地点における最大火山礫

図3 口永良部島における調査時の火山灰堆積状況(2019年2月7日撮影)

(a) 古岳南東方の林道上の堆積物(火口南南東約 1.6km)。降灰量11757g/m²。(b) 写真(a) 撮影地 点で集めた最大火山礫。(c) 堆積物上部の火山砂礫 層をはがした状態。下部の細粒火山灰主体の層(厚 さ約2-3mm)からなる。古岳南東方の林道上の堆 積物(火口南東約1.5km)。堆積物全体の降灰量 5202g/m²。



図4 口永良部島南東部における堆積量と最大粒径値の分布

2018年10月21日~2019年1月29日の口永良部島噴出物構成粒子の特徴

2018 年 10 月~2019 年 1 月の口永良部島噴出物は、連続的な噴煙活動が見られた 10 月から 12 月 上旬の噴出物が比較的高い割合で本質物質を含むのに対し、12 月 18 日以降の爆発噴火の噴出物に は多量の変質岩片が含まれる.連続噴煙活動中には固結しつつあるマグマの連続的な破砕と排出が 続いたのに対し、12 月以降の爆発では破砕されたマグマのほか、火口壁や火口底を構成する変質岩 片が大量に破砕・放出されたと考えられる.

2018 年 10 月~11 月の一連の噴火噴出物には、新鮮でガラス光沢をもつ本質物粒子が含まれる. 本質物粒子の含有量は噴火ごとに異なる.

2018 年 12 月 18 日 16 時 37 分, 1 月 17 日 9 時 19 分, 1 月 29 日 17 時 13 分に発生した火砕流を 伴う爆発噴火の噴出物は様々な程度に変質した岩片を多量に含む.少量の本質物が含まれることか ら,爆発は火道上部のマグマも巻き込んで発生したと考えられる.

試料採取・送付は、気象庁口永良部連絡事務所および屋久島町の協力を得て実施した.



図1 連続噴火による火山灰.10月23日の口永良部島噴出物の構成粒子.本質物と考えられるガラス光沢をもつ新鮮な粒子(G)が散在する.10月23日口永良部島北部の寝待地区で採取.



図2. 爆発噴火に伴う火山灰.2019年1月29日噴火の口永良部島噴出物構成粒子(500~700 µm). 熱水変質粒子(A),高温酸化粒子(O),非変質岩片(L),ガラス光沢粒子(G).噴火翌日の 30日午後に新岳南東約2 kmの地点で採取.

2018 年 10 月 21 日~2019 年 1 月 29 日の口永良部島噴出物鉱物組成の経時変化

2018 年 10 月~2019 年 1 月の口永良部島噴出物は、鉱物組み合わせから硫酸塩鉱物(石膏、硬 石膏、ミョウバン石)を含むグループ(A)と、主として斜長石のみを含むグループ(B)に分けられる. グループ区分は、活動時期にも対応し、2018 年 10 月 21 日~11 月 12 日までの小規模な噴火が連 続した時期は、B グループの降灰が認められる.一方、2018 年 12 月 6 日~2019 年 1 月 29 日まで の噴火では A グループの降灰が認められ、この期間の噴出物には熱水の関与が相対的に増加して いた可能性が示唆される.

2018 年 10 月~2019 年 1 月の口永良部島噴出物について,構成鉱物種を XRD 分析により確認 した. 試料採取・送付は、気象庁口永良部連絡事務所および屋久島町の協力を得て実施した(表 1). 分析にはふるい分けを行っていない試料(全試料)を用いた.

2018 年 10 月~2019 年 1 月の口永良部島噴出物は,構成鉱物組み合わせから 2 つのグループに 分類できる (図 1, 2).

グループA:硫酸塩鉱物(石膏,硬石膏,ミョウバン石)を顕著に含む

グループB:硫酸塩鉱物(石膏,硬石膏,ミョウバン石)をほとんど含まない

2018 年 10 月 21 日から 11 月 12 日までの連続噴火では硫酸塩鉱物(石膏,硬石膏,ミョウバン石)をほとんど含まず,主として斜長石のみを含む噴出物(グループB)が放出された.噴出物中の斜長石は新鮮な火山岩粒子に由来すると考えられ,構成粒子中に本質物粒子が多く含まれることと調和的である.

2018年12月6日から2019年1月29日までの噴火では硫酸塩鉱物(石膏,硬石膏,ミョウバン 石)を顕著に含む噴出物が放出された(グループ A). 同様の鉱物組み合わせは2014年8月3日お よび2015年5月28日噴火の噴出物でも確認できる.これらの硫酸塩鉱物は噴火の際に放出され た熱水に由来すると考えられ,噴出物に対する熱水の関与が大きかった可能性が示唆される.ま た口永良部火山における噴出物には,御嶽山や草津白根山などの水蒸気噴火噴出物に特徴的なカ オリナイト,スメクタイトなどの粘土鉱物の含有はほぼ認められない特徴がある.

以上から,2018 年 10 月 21 日~11 月 12 日までの連続噴火ではマグマが噴火に関与した可能性 が高く,2018 年 12 月 6 日~2019 年 1 月 29 日までの噴火では熱水の関与が相対的に増加した可能 性が示唆される.

試料名	提供者	回収日	採取場所	備考
SVO20140806-1	GSJ	2014年8月6日	前田地区	2014年8月3日噴
				火噴出物
NKG3	中川氏	2015年5月29日	屋久島西部林	2015年5月28日
			道	噴火噴出物
18Keb02-4	JMA	2018年10月23日	寝待地区	
18Keb03-1	JMA	2018年10月26日	田代地区	2018年10月26日
				噴火噴出物
18Keb07-2	JMA	2018年11月5日	前田地区	2018年11月5日
				噴火噴出物
18Keb09	JMA	2018年11月12日	田代地区	2018年11月12日
				噴火噴出物
18Keb15	JMA	2018年12月6日	湯向地区	2018年12月6日
				噴火噴出物
18Keb17	JMA	2018年12月18-20日	田代地区	2018年12月18日
				噴火噴出物
18Keb19	JMA	2018年12月28日	屋久島南西部	2018年12月28日
				噴火噴出物
19Keb03	JMA	2019年1月18日	古岳南山麓	2019年1月17日
				噴火噴出物を含む
19Keb05	JMA	2019年1月18-22日	古岳南山麓	2019年1月20日
				噴火噴出物を含む
19Keb08-1	JMA	2019年1月25-30日	屋久島宮之浦	2019年1月29日
				噴火噴出物を含む

表1 試料リスト

第143回火山噴火予知連絡会

産業技術総合研究所



図1. 口永良部島噴出物の構成粒子(全試料)の XRD チャート. 赤枠で示した試料は爆発ないし高い噴煙を伴った噴火による噴出物. 右欄日付は, サンプル採取 状況から推測される噴火イベントの発生日を示す.

2018年12月から2019年1月の口永良部島火山噴火による火砕流

2018 年 12 月~2019 年 1 月に口永良部島で発生した火砕流は新岳火口から約 2km の範囲に 分布しており,高温であった証拠を持つものがある.火砕流の分布域は 2014-2015 年の火砕 流に比べて同程度か小規模である.火砕流の流動速度は 20~30m/s 程度であるが,流下速度 の速いものほど遠方に到達する傾向を示す.

口永良部島火山で最近発生した火砕流について、気象庁などが撮影した航空写真を判読し て分布を推定した(図1).図示した範囲は、火砕サージを含む火砕流の最大到達範囲で、火 山灰の堆積状況及び植生等の影響状況から判断した.2019年1月17日の火砕流では森林火 災と思われる白煙が観察され、高温の物質を含む火砕流であったことを示唆する.2019年1 月29日の火砕流については新岳火口から西側山麓斜面に最大約600m程度の分布であるが、 東側については観察記録がない.2014~2015年に発生した火砕流の分布と比較すると、同程 度か小規模であり、新岳火口の西側に多くの火砕物が流下する傾向は変わっていない(図2).



2019.1.17

2018.12.18

図1 左:2019年1月17日の火砕流分布.右:2018年12月18日の火砕流分布.基図に 国土地理院電子国土地図を使用



2014.8.3

2015.5.29

図2 左:2014年8月3日の火砕流分布,右:2015年5月29日の火砕流分布 気象庁の監視カメラ映像を基に、2015年から2019年の間に発生した火砕流の流下速度を 求めた(表1).火砕流の平均流下速度は5-47m/sの範囲で,約20-30m/sの値を示すものが多 い.最も遠方まで流れた2015年5月29日の火砕流が最も速く,最も短距離であった2019年 1月29日が最も遅い.総じて速度の高い火砕流ほど流下距離が長い傾向が認められる.なお, 2015年5月29日,2018年12月18日,2019年1月17日に発生した火砕流は,いずれも噴 火直後に噴煙柱の一部が崩れて発生したものである.2019年1月29日に発生した火砕流は 火口からあふれ出るように発生したものであり,発生様式が異なる.

謝辞:気象庁福岡管区火山活動監視センターおよび鹿児島地方気象台には噴火の映像を提供 していただいた.ここに記して感謝いたします.

発生年月日	流下方向	平均流速(斜距離で算出), m/s					
2015 年 5 日 20 日	北西	31					
2013 4 5 月 29 日	北西 南西 北西 南西 北西 北西	47					
2019 年 12 日 19 日	北西	22					
2010 平 12 万 10 日	南西	18					
2010 年 1 日 17 日	北西	26					
2019 - 4 1 7 17 1	南西	36					
2010 年 1 日 20 日	北西	7					
2019	南西	5					

表1 口永良部火山で発生した火砕流の流下速度

口永良部島

顕著な地殻変動は観測されていません。



点番号	点名	日付	保守内容
940098	枕崎	20140114	アンテナ交換
		20180913	アンテナ・受信機交換
960725	口永良部島	20180205	受信機交換
960726	南種子	20160712	受信機交換
		20180206	受信機交換
960727	上屋久2	20161206	受信機交換

口永良部島周辺の各観測局情報



☆ 固定局:枕崎(940098)

国土地理院·気象庁 口永良部島

※[R3:速報解]は暫定値、電子基準点の保守等による変動は補正済み



ロ永良部島周辺GEONET (電子基準点等)による連続観測基線図(2)



国土地理院・気象庁

(注) 口永良部島(960725)は停電のため、2015/6/7~12/2が欠測しました。 ※[R3:速報解]は暫定値、電子基準点の保守等による変動は補正済み

ロ永良部島の SAR 干渉解析結果について





背景:地理院地図 標準地図・陰影起伏図・傾斜量図

本解析で使用したデータは、火山噴火予知連絡会衛星解析グループの活動を通して得られたものです。

口永良部島





【新岳の拡大図】



(c)(d)中の赤線は SAR 干渉画像から読み取った非干渉領域の外縁を表す。 背景:地理院地図 標準地図・陰影起伏図・傾斜量図

本解析で使用したデータは、火山噴火予知連絡会衛星解析グループの活動を通して得られたものです。

第143回火山噴火予知連絡会



	(a)	(b)	(c)	(d)	(e)	(f)		
衛星名	ALOS-2	ALOS-2	ALOS-2	ALOS-2	ALOS-2	ALOS-2		
	2018/10/26	2018/08/20	2018/12/21	2018/12/24	2019/01/18	2019/01/21		
毎週口吐	2018/12/21	2018/12/24	2019/01/18	2019/01/21	2019/02/01	2019/02/04		
1100000000000000000000000000000000000	23:44 頃	12:19 頃	23:44 頃	12:19 頃	23:44 頃	00:25 頃		
	(56 日間)	(126 日間)	(28 日間)	(28 日間)	(14 日間)	(14 日間)		
衛星進行方向	北行	南行	北行	南行	北行	北行		
電波照射方向	左	右	左	右	左	右		
観測モード*	U-U	U-U	U-U	U-U	U-U	U-U		
入射角	34.5°	37.6°	34.5°	37.6°	34.5°	47.1°		
偏波	НН	HH	НН	НН	НН	НН		
垂直基線長	+ 57 m	- 60 m	+ 97 m	+ 267 m	- 155 m	+ 76 m		
ト 古八仞 兆 (2m) エー じ								

*U: 高分解能(3m)モード

本解析で使用したデータは、火山噴火予知連絡会衛星解析グループの活動を通して得られたものです。

口永良部島



地形図は国土地理院 HP の地理院地図を使用した

○ 最近の活動について

年月日	調査機関等	活動状況
		口永良部島漁港全域及びその南西約 300m に黄緑色の変
2018/12/18	第十管区	色水域が分布していた(第1図)。
	海上保安本部	古岳南東にごく薄い青緑色の変色水域が幅約150m、長さ
		約 400m で分布していた(第2図)。



第1図 口永良部島 口永良部漁港の変色水域 2018 年 12 月 18 日 11:45 撮影



第2図 口永良部島 古岳南東の変色水域 2018年12月18日 11:41 撮影

口永良部島

〇口永良部島の変色水分析結果

1. はじめに

東京工業大学と海上保安庁は平成 30 (2018) 年 8 月 17 日と平成 31 (2019) 年 1 月 19 日 に口永良部島の口永良部漁港及び沿岸海域において、変色水を採取して分析を実施した。

2. 分析結果

○平成 30(2018) 年8月 17日に採取した試料の分析結果

番号	緯度(゜′)	経度(°′)	水温(℃)	pН	F(mg/L)	C1(mg/L)	$SO_4(mg/L)$
1	N30-27.72	E130-11.48	29.9	8.10	1.20	18,600	2,530
2	N30-26.12	E130-11.44	29.4	8.16	1.21	18,900	2,360
3	N30-25.16	E130-13.24	29.7	8.16	1.21	18,800	2,540
4	N30-25.64	E130-14.42	29.9	8.14	1.20	18,900	2, 480

○平成 31 (2019) 年1月19日に採取した試料の分析結果

番号	緯度(゜′)	経度(°′)	水温(℃)	pН	F(mg/L)	C1(mg/L)	$SO_4(mg/L)$
5	N30-27.42	E130-11.65	22.5	7.90	1.23	19, 170	2,630
6	N30-26.63	E130-11.46	22.7	8.00	1.22	18,030	2,630
\bigcirc	N30-26.07	E130-11.69	22.5	7.98	1.33	18, 810	2,630
8	N30-25.28	E130-13.18	22.7	8.12	1.29	19, 270	2,680
9	N30-25.92	E130-14.24	23.0	8.06	1.30	19,650	2,780



平成 30 (2018) 年 8 月 17 日の採取地点図



平成 31 (2019) 年 1 月 19 日の採取地点図

3. 口永良部島沿岸における変色海水及び海水中の陰イオン成分比と pH との関係



図1 口永良部島沿岸における変色海水及び海水中の陰イオン成分比とpHとの関係

4. 分析方法

- ・試料水を 5A 濾紙で濾過し、濾液を以下の方法で分析した。
- pH:pH 電極によって測定
- ・F:トリメチルシリル化蒸留法によって単離した後、フッ素イオン電極によって測定
- ・C1, S04: 蒸留水で希釈し、イオンクロマトグラフによって測定

5. 平成 30 (2018) 年 8 月 17 日の採取時の状況

・採取後の試料①、②、③、④のいずれの試料にも変色等を認めず。
※沿岸部の変色水が存在している海域で採水ができていない可能性がある。

6. 平成 30 (2018) 年 8 月 17 日の採取試料の分析結果

- ・試料水には沈澱は殆ど認められなかった。
- ・ロ永良部漁港内で採取した試料①は若干 pH が低いものの、水温, pH, 陰イオン成分の 濃度に関しては採取地点間での格段の差異は認められず、外洋の海水の成分と比較して も殆ど差異は認められなかった。

7. 平成 31 (2019) 年1月 19日の採取時の状況

- ・試料⑤、⑥、⑦の3地点において変色水を確認した。
- ・試料⑥の変色水は帯状に試料⑦まで続いており、色は乳白色で、試料⑥が最も濃く、海面に泡状のものも確認でき、試料⑦に近づくにつれて薄くなった。
- ・試料⑤の変色水も乳白色で、試料⑥と試料⑦の中間程度の濃度であり、泡状のものは確認できなかった。

8. 平成 31 (2019) 年1月 19日の採取試料の分析結果

- ・試料水の沈殿については現在、分析準備中。
- ・ロ永良部漁港内で採取した試料⑤、ロ永良部島の南西岸で採取した試料⑦は平成 30(2018)年に比べて pH が低く、ロ永良部島の海岸部から湧出している熱水の影響を反映 しており、火山活動の影響が増大している。
- ・陰イオンの分析については、海岸から湧出している熱水は、平成 30(2018)年に比べてフ ッ化物イオンと硫酸イオンが増えていることを示唆しており、より高温のマグマの影響 を受けているものと考えられる(図1)。
- ・平成26(2014)年の噴火以降、口永良部漁港内及び沿岸海域において、比較的濃い褐色系の変色域の発生が顕著になっている。熱水活動は現在も活発な状態にあり、新岳の火山 活動と関連している可能性がある。

○平成 30(2018) 年 8 月 16 日の口永良部島の変色水の状況と平常時の状況(参考)



第1図 口永良部漁港の変色水域2018年8月16日 12:00頃撮影※試料①、⑤付近の変色水の状況



平常時の口永良部漁港の状況 2009年2月5日撮影

第143回火山噴火予知連絡会



第2図 御島埼周辺の変色水域2018年8月16日12:00頃撮影※試料②、⑥、⑦付近の変色水の状況



平常時の御島埼周辺の状況 2010年9月22日 11:29頃撮影



第3図 平床鼻東部の変色水域 2018年8月16日 12:00頃撮影 ※試料③、⑧付近の変色水の状況



平常時の平床鼻東部の状況 2010年9月22日 11:30頃撮影

第143回火山噴火予知連絡会

東京工業大学・海上保安庁



第4図 古岳東の変色水域 2018年8月16日 12:00頃撮影 ※試料④、⑨付近の変色水の状況



平常時の古岳東の状況 2010年9月22日 11:31頃撮影



第5図 撮影位置図

諏訪之瀬島 (2019年1月31日現在)

御岳火口では、爆発的噴火が繰り返し発生した。 諏訪之瀬島では長期的に噴火を繰り返しており、今後も火口周辺に影響を及ぼす程度の噴火が 発生すると予想されるので、火口から概ね1kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する 大きな噴石に警戒が必要である。風下側では火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流され て降るため注意が必要である。 -2.5

(2)



気象庁



-5.0-2019 年 諏訪之瀬島 長期の火山活動経過図(2003年1月~2019年1月) 図1

・長期にわたり噴火を繰り返している。

・諏訪之瀬島周辺を震源とするA型地震は月回数で5~13回、B型地震は月回数で4~106回と、とも に少ない状態であった。

・GNSS 連続観測では、火山活動によると考えられる変化は認められなかった。

トンガマ南西観測点の地震計の機器障害により、ナベタオ観測点(計数基準:上下動0.5 µ m/s、爆発 地震計数基準:上下動3µm/s)で計数している期間がある。 の基線は図2のに対応している。の基線の空白部分は欠測を示している。



図2 諏訪之瀬島 短期の火山活動経過図(2018年2月~2019年1月)

- <2018年10月~2019年1月の状況>
- ・爆発的噴火が2018年11月に21回、2019年1月に1回発生した。
- ・噴火による噴煙の高さの最高は、2018 年 11 月 16 日 06 時 20 分及び 2018 年 11 月 23 日 13 時 51 分の 噴火に伴う火口縁上 2,000mであった。
- ・諏訪之瀬島周辺を震源とするA型地震の発生が最も多かったのは、2019年1月24日の4回であった。
- ・B型地震の発生が最も多かったのは、2018年11月16日の19回であった。
- ・2018 年 10 月、12 月及び 2019 年 1 月は火山性微動の発生がなく、2018 年 11 月は火山性微動の継続時 間の月合計が 18 分と少ない状態であった。

トンガマ南西観測点の地震計の機器障害により、ナベタオ観測点(計数基準:上下動 0.5 µ m/s、爆発 地震計数基準:上下動 3 µ m/s)で計数している期間がある。

ALOS-2/PALSAR-2 データを用いた 諏訪之瀬島における SAR 干渉解析結果

御岳山頂の北北東付近で衛星視線方向短縮の位相変化が認められたが、ノイズの可 能性がある。

1. はじめに

ALOS-2/PALSAR-2 で撮像された諏訪之瀬島周辺のデータについて干渉処理を行ったので報告する。

2. 解析データ

解析に使用したデータを第1表に示す。

第1表 干渉解析に使用したデータ

Path-Frame	Orbit	Looking	Inc. angle	Earliest Scene	Latest Scene	Figure No.
23-3020(SM1_U2-8)	南行	右	39.6°	2015.12.28	2019 11 26	第1図
				2017.11.27	2018.11.20	第2図-A
131-580(SM1_U2-6)	北行	右	32.4°	2018.02.27	2019.01.29	第2図-B

3. 解析結果

北行軌道及び南行軌道のペアについて、パス23では約3年と約1年、パス131では約1 年のペアで解析を行った。南行軌道のパス23では御岳山頂の北北東約1km付近で衛星視線 方向短縮の位相変化がどちらのペアでも認められたが、DEHMエラーもしくはノイズの可能 性がある。パス131ではノイズレベルを超えるような位相変化は検出されなかった。

なお、各干渉解析結果について、対流圏遅延補正などは行っていないため、ノイズが重 畳している可能性がある。

謝辞

本解析で用いた PALSAR-2 データは、火山噴火予知連絡会が中心となって進めている防災 利用実証実験(衛星解析グループ)に基づいて、宇宙航空研究開発機構(JAXA)にて観測・ 提供されたものである。PALSAR-2 に関する原初データの所有権は JAXA にある。PALSAR-2 の解析ソフトウェアは、防災科学技術研究所の小澤拓氏により開発された *RINC*を使用した。 また,処理の過程や結果の描画においては、国土地理院の数値地図 10m メッシュ(標高) を元にした DEHM を、地形の描画には数値地図 25000(行政界・海岸線)のデータを使用した。 ここに記して御礼申し上げます。



第1図 パス23 (SM1_U2-8) による諏訪之瀬島周辺の干渉解析結果(期間:約3年) 図中の白三角印は山頂位置を示す。丸印は GNSS 観測点、四角印は傾斜観測点を示す。御岳山頂の 北北東約 1km 付近で衛星視線方向短縮の位相変化が認められる。



第2図 パス23 (SM1_U2_8) 及びパス131 (SM1_U2_6) による諏訪之瀬島周辺の干渉解析結果 (期間: 約1年)

凡例は第1図と同じ。パス23では御岳山頂の北北東約1km付近で衛星視線方向短縮の位相変化が 認められるが、パス131ではノイズレベルを超えるような位相変化は認められない。 諏訪之瀬島における長期的噴火活動・地震活動の推移



諏訪之瀬島における火山性地震の月別発生回数 (2019年1月31日まで)

諏訪之瀬島における短期的噴火活動・地震活動の推移



諏訪之瀬島における火山性地震の日別発生回数 (2019年1月31日まで)

諏訪之瀬島



国土地理院

※[R3:速報解]は暫定値、電子基準点の保守等による変動は補正済み

諏訪之瀬島周辺の地殻変動(水平:3か月)

基準期間:2018/10/27~2018/11/05[F3:最終解] 比較期間:2019/01/27~2019/02/05[R3:速報解]



☆ 固定局:枕崎(940098)

国土地理院・気象庁

諏訪之瀬島の SAR 干渉解析結果について



背景:地理院地図 標準地図・陰影起伏図・傾斜量図

阿蘇山 (2019年2月18日現在)

阿蘇山では、噴火は発生していない。

2月に入り、火山活動がやや高まった状態で経過している。

火山ガス(二酸化硫黄)の放出量は、500トン~1,800トンと増減を繰り返しながら概ねやや 多い状態で経過していたが、2月1日には2,200トンと増加し、その後も1,500~1,700トンと やや多い状態で推移している。また、火山性微動の振幅は、概ね小さい状態で経過していたが、 2月4日にやや増大し、5日以降は停滞した状態が続いている。

GNSS 連続観測では、マグマ溜りを挟む基線に特段の変化は認められていないが、火山性地震は多く、孤立型微動は増減があるが概ね多い状態で経過している。

中岳第一火口内では、引き続き緑色の湯だまりが火口底の 10 割溜まっていた。湯だまりの表面温度は 65~74 で、噴湯を確認した。南側火口壁及び南西側火口壁の一部では、熱異常域(最高温度:南側火口壁約 630 、南西側火口壁約 390)を確認した。

傾斜計では、火山活動に伴う特段の変化は認められない。

火口内では土砂や火山灰が噴出する可能性がある。また、火口付近では火山ガスに注意が必要である。



図1 阿蘇山 火山活動経過図(1989年1月~2019年2月18日)

<1989年1月~2019年2月18日の状況>

・火山性地震は、2017年3月以降概ね多い状態で経過している。

2002年3月1日から検測対象を変位波形から速度波形に変更した。

と の赤線は回数の積算を示している。

の湯だまり温度等は赤外放射温度計で計測していたが、2015年6月から赤外熱映像装置により計測している。 湯だまり量は、量を確認できた場合のみ表示し、1割に満たない場合は0割としている。



図2 阿蘇山 火山活動経過図(2017年2月~2019年2月18日)

<2018年10月~2月18日の状況>

- ・火山性地震は、増減があるが引き続き多い状態で経過し、1月下旬には1日あたり600回を越えた。
- ・孤立型微動も、増減があるが引き続き1日あたり200回前後発生し、概ね多い状態で経過している。
- ・火山性微動の振幅は、概ね小さい状態で経過していたが、2月4日に緩やかながらやや増大し、5日 以降は停滞した状態が続いている。
- ・火山ガス (二酸化硫黄)の1日あたりの放出量は、500~1,800トンと、増減を繰り返しながら概ねや や多い状態で経過していたが、2月1日には2,200トンと増加し、その後も1,500~1,700トンとやや 多い状態で推移している。
・南側火口壁の最高温度は、10月は約600、11月は約630、12月は約580、1月は約560(2018 年6月:最高温度約738)で、7月以降やや低くなったが、引き続き高い状態が続いている。

と の赤線は回数の積算を示している。

火山性微動の振幅が大きい状態では、火山性地震、孤立型微動の回数は計数できなくなっている。 の湯だまり温度等は赤外放射温度計で計測していたが、2015年6月から赤外熱映像装置により計測している。



(中岳西山腹観測点南北動成分、2018年10月~2018年11月)



75

気象庁



古坊中観測点 (広帯域地震計 上下成分 BPF (10s-100s)) 2019 年 1 月 17 日



2019年1月17日17時25分~17時35分

2019年1月17日17時25分~35分

図4 阿蘇山 1月17日17時30分頃の長周期地震の波形 (中岳西山腹観測点上下動成分、古坊中観測点上下成分 (BPF))



- 図 5 阿蘇山 1月17日17時30分頃の傾斜計の秒値記録(古坊中観測点、仙酔峡観測点) ・傾斜計でも長周期地震に伴う変位波形が記録された。振幅は図中のスケールが約11 µm、極性は 記録の上が北・東方向。
 - ・ステップ状の傾斜変動は見られなかった。76



図 6-1 阿蘇山 GNSS 観測による基線長変化(2010年10月~2019年2月18日)

これらの基線は図7の ~ に対応している。基線の空白部分は欠測を示している。 2016年4月16日以降の基線長は、平成28年(2016年)熊本地震の影響による変動が大きかったため、 この地震に伴うステップを補正している。 2016年1月以降のデータについては、解析方法を変更している。 (国):国土地理院



図 6-2 阿蘇山 GNSS 観測による基線長変化(2016 年 1 月~2019 年 2 月 18 日)

GNSS 連続観測では、火口を挟む基線に緩やかな縮みの傾向がみられている。マグマ溜りを挟む基線に 特段の変化は認められない。

これらの基線は図7の ~ に対応している。図の空白部分は欠測を示す。 2016年4月16日以降の基線長は、平成28年(2016年)熊本地震の影響による変動が大きかったため、 この地震に伴うステップを補正している。 (国):国土地理院



図7 阿蘇山 GNSS 連続観測点と基線番号

小さな白丸()は気象庁、小さな黒丸()は気象庁以外の機関の観測点位置を示す。 (国):国土地理院 この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図 50mメッシュ(標高)』を使用した。

ALOS-2/PALSAR-2 データを用いた 阿蘇山における SAR 干渉解析結果

ノイズレベルを超えるような位相変化は認められない。

1. はじめに

ALOS-2/PALSAR-2 で撮像された阿蘇山周辺のデータについて干渉処理を行ったので報告する。

2. 解析データ

解析に使用したデータを第1表に示す。

表1 干渉解析に使用したデータ

Path-Frame	Orbit	Looking	Inc. angle	Earliest Scene	Latest Scene	Figure No.
23-2950(SM1_U2_7)	南行	右	36.1°	2017.11.13	2018.12.10	第1図
				2018.09.17		第2図

3. 解析結果

南行軌道の長期及び短期ペアについて解析を行った。長期ペアでは中岳火口付近で非干 渉領域が認められるが、短期ペアではノイズレベルを超えるような位相変化は認められな かった。

なお、各干渉解析結果について、対流圏遅延補正などは行っていないため、ノイズが重 畳している可能性がある。

謝辞

本解析で用いた PALSAR-2 データは、火山噴火予知連絡会が中心となって進めている防災 利用実証実験(衛星解析グループ)に基づいて、宇宙航空研究開発機構(JAXA)にて観測・ 提供されたものである。PALSAR-2 に関する原初データの所有権は JAXA にある。PALSAR-2 の解析ソフトウェアは、防災科学技術研究所の小澤拓氏により開発された *RINC*を使用した。 また、処理の過程や結果の描画においては、国土地理院の数値地図 10m メッシュ(標高) を元にした DEHM を、地形の描画には数値地図 25000(行政界・海岸線)のデータを使用した。 ここに記して御礼申し上げます。



2017/11/13 - 2018/12/10 ^{392 days}

第1図 パス23(SM1_U2_7)の長期ペアによる阿蘇山周辺の干渉解析結果

図中の白三角印は山頂位置を示す。丸印は GNSS 観測点、四角印は傾斜観測点を示す。中岳火口付 近において非干渉領域が認められる。



第2図 パス23(SM1_U2_7)の短期ペアによる阿蘇山周辺の干渉解析結果 凡例は第1図と同じ。ノイズレベルを超えるような位相変化は認められない。

阿蘇山における地磁気全磁力変化

中岳第一火口の西約1km における全磁力観測点では火山活動によるとみられる有意な変化は認められない。

〇観測の結果

第1図に阿蘇山における全磁力観測点の位置を示す。第2図に参照点 AHK を基準とした 2011 年 1月から 2019 年 1月までの連続観測点 CW2、CW3、ASJ の全磁力日平均値を示す。

火口西側のASJでは3nT程度の年周変化で推移しており、火山活動によるとみられる有意な変化は認められない。



第1図 阿蘇山の全磁力観測点配置図(◎:連続観測点)

この地図の作成には国土地理院発行の「数値地図 50m メッシュ(標高)」と「数値地図 10m メッシュ(火山標高)」を使用した(承認番号 平 29 情使、第 798 号)。



第2図 AHK を基準とした連続観測点 CW2、CW3、ASJ における全磁力日平均値、火山性地震発 生回数、孤立型微動発生回数(2011年1月~2019年1月)

CW2、CW3は2014年2月に観測を終了した。
※1:2016年4月15日 熊本地震に伴うAHKの観測環境変化による変動
※2:2016年10月7日 爆発的噴火に伴う降灰によるASJの変動
※3:2017年3月22日 ASJの検出器庫内火山灰除去に伴う変動

阿蘇山・中岳の活動概況

マグマたまりをまたぐ測線の基線長変化(図1最上段、および図2最上段)は2018年12月半ば以降に短縮 から停滞あるいは伸びに転じている。

長周期地震の振幅は、2016年10月の噴火以降小さい状態であったが、2018年5月以降に微増し、その傾向 は2018年10月まで継続し、2018年12月にかけて振幅の小さい状態になった。しかし、2019年1月以降は振 幅および発生回数ともに微増傾向にあり、特に1月17日の大振幅の長周期地震発生以降にさらに振幅が大きくなっ たが2月12日前後にピークを迎えた。、短周期の微動振幅も2019年1月以降に大きくなったが、2月8日頃から 徐々に小さくなっている。

第一火口南壁の放熱率は2018年4月以降に上昇して2014年噴火前のレベルに達した。ただし、火山ガスの 多い状態が継続しており、2018年12月以降、測定できていない。

一方、第一火口南西における磁場変化(図1、最下段)は2017 年 10 月以降僅かに上昇(年あたり 1nT 程度) する傾向に変化が見られていた。しかし、2018 年 10 月頃から僅かな全磁力値減少のセンスの変化が始まり、それ が2月現在まで続いている。このトレンドは地下岩石の消磁を表しており、地下で緩やかな温度上昇が進行してい ることを示唆している。





なお、基線長変化図には国土地理院のGPSデータも使用している。

阿蘇山・中岳における微動の発生状況、基線長変化(2004~2019.2.16)

マグマたまりをまたぐ測線の基線長変化(図 2 最上段)は 2018 年 12 月半ば以降に短縮から停滞あるい は伸びに転じている。

長周期地震の振幅は上述の基線長変化に対応するように、2019年1月以降は振幅および発生回数ともに 微増傾向にあり、1月17日の大振幅の長周期地震発生以降にさらに振幅が大きくなった。発生回数は2月 12日前後にピークを迎えた。

短周期の微動振幅も短周期の微動振幅も 2019 年 1 月以降に大きくなったが、2 月 8 日頃から徐々に小 さくなっている。

最近の短周期微動の発生様式(青枠)を火口の火口底開孔イベント時 (2011 年 5 月、2014 年 1 月、赤枠のものと比較すると、2Hz 帯や 10Hz 帯の振幅が小さいことがわかる。



図2. 阿蘇火山・中岳における基線長変化と微動振幅、長周期地震の発生様式

期間は2004年1月1日から2019年2月16日(一部データ欠落)。 なお、基線長変化図には国土地理院のGPSデータも使用している。

阿蘇カルデラにおける水準測量

2018年9月30日から10月6日の期間において2012年以来となる水準測量を実施した。測量参加機関は、 京大理、京大防災研、九大理、名大環境、日大文理、東濃地震科学研究所、東大地震研である。

2012 年 9 月との比高差を、同時期の GEONET960701 の楕円体高差を基準にして算出したものが図 3 で ある。

これまでの水準測量では、阿蘇山麓北側の AVL1 基準とした場合に草千里を中心とするゆるやかな沈降 (0.5cm/year 以下)が検出されていた。しかし、今回の測量結果は、2016年熊本地震による地殻変動を反映す るもの(2012年9月と比較すると草千里周辺で約30cmの沈降)となった(図4)。





図3. 阿蘇火山における水準測量の結果

2012年9月と2018年9月の比高変化。960701のF3解の楕円体高度を1ヶ月平均したものから同期間の 高度差を算出し、この値を基準として、水準点の比高差としている。なお、2016年熊本地震の地表断層トレ -スは、熊原康博・他(2016):2016年熊本地震に伴う地表地震断層の分布とその特徴. JpGU2016, MIS34-05による。



86



阿蘇山の火山活動について

ASIV=地震計(短周期・広帯域)、傾斜計、気圧計、温度計、雨量計、GNSS ASHV=地震計(短周期・広帯域)、傾斜計、気圧計、温度計、雨量計、GNSS ASNV=地震計(短周期・広帯域)、傾斜計、気圧計、温度計、雨量計、GNSS ASTV=地震計(短周期・広帯域)、傾斜計、気圧計、温度計、雨量計、GNSS

資料概要

○ 地震活動と地殻変動

2018 年 9~12 月期間中、傾斜計記録(図1)において、降雨の影響と考えられる変化以外の 火山活動に伴う明瞭な変動は認められない。GNNS 観測(図3と4)において、2017 年 9 月頃か ら 2019 年 2 月 16 日までの期間、ASNV-ASHV(図3と4の下から2段目)以外で、基線長の縮み が認められる。



防災科学技術研究所

防災科学技術研究所 GNSS 観測点及び国土地理院 GEONET で得られた、 2018 年 09 月 19 日-2019 年 02 月 14 日の地殻変動【熊本 (950465) 固定】







2016 年 4 月 14 日と 16 日に発生した熊本地震の影響で一部基線長に大きなステップが見られる。

阿蘇山

防災科学技術研究所







第143回火山噴火予知連絡会

表1 GNSS観測履歴

観測点番号	観測点名	図中記号	日付	保守内容
			2010/4/7	2周波観測開始
			2012/7/16	アンテナ故障
			2012/10/18	新アンテナ設置(GrAnt-G3T)
阿蘇山白水	同なしら水		2012/2/12	修理済みアンテナに交換、アンテナ台交換
		2013/2/13	作業	
	(ASHV)		2013/8/1	アンテナ故障
			2013/8/28	新アンテナ設置(RingAnt-DM→GrAnt-G3
			2013/8/28	アンテナ交換
		K-1	2016/12/13~12/25	通信断
	阿蘇山一の宮		2010/4/6	2周波観測開始
			2013/2/13	アンテナ台交換作業
	(ASIV)	K-1	2016/12/12~12/24	通信断
	阿蘇山永草 (ASNV)		2014/5/23	2周波観測開始
	阿蘇山高森 (ASTV)		2014/4/25	2周波観測開始

第143回火山噴火予知連絡会

阿蘇山

顕著な地殻変動は観測されていません。



阿蘇山周辺GEONET(電子基準点等)による連続観測基線図(1)

点番号	点名	日付	保守内容
960701	長陽	20150609	アンテナ交換
		20171219	伐採
960703	阿蘇	20140626	伐採
		20171219	伐採
960704	高森	20170115	受信機交換

阿蘇山周辺の各観測局情報

基線変化グラフ(短期)



基線変化グラフ(長期)

(注)平成28年熊本地震の影響を受けています。 ※[R3:速報解]は暫定値、電子基準点の保守等による変動は補正済み



基線変化グラフ(長期)

(注) 平成28年熊本地震の影響を受けています。

※[R3:速報解]は暫定値、電子基準点の保守等による変動は補正済み

阿蘇山

阿蘇山周辺の地殻変動(水平:3か月)

基準期間:2018/10/27~2018/11/05[F3:最終解] 比較期間:2019/01/27~2019/02/05[R3:速報解]



☆ 固定局:北方(960711)

阿蘇山周辺の地殻変動(水平:1年)

国土地理院・気象庁・防災科学技術研究所

阿蘇山



96

国土地理院





背景:地理院地図 標準地図・陰影起伏図・傾斜量図

本解析で使用したデータの一部は、火山噴火予知連絡会衛星解析グループの活動を通して得られたものです。

阿蘇山